中国地区英語教育学会研究紀要No.10 (1980)

日本人による英語会話の談話分析

広島大学大学院
柳　井　智　彦

1　はじめに

外国語の学習は習得した知識を実際のコミュニケーションに生かせてこそ真に意味のあるものとなる。ところが，もっている知識のうち何割が，たとえばスピーキングに結びつくかは，はなはだ疑問が多い。現在，コミュニケーションのための英語が重視されつつあるが，日本人の話す英語の実態は必ずしも明らかにはされていない。本研究は日本人の大学生同士による英語の対話を録音し，スピーキングではどのような英語が用いられるのかを分析することを目的とする。分析の視点は談話 (discourse) ，特に会話の受け答えにあり，文法的誤りの分析は意図していない。先行する発話にうまく対応していくことは，文法と同様に重要なことであると考える。

ところで，録音をもとに自然な英語の会話を分析した研究には Crystal and Davy （①）が母国語話者について記述した例があり，また言語発達や言語障害の研究にも自然な会話が分析されている場合がある。しかし日本人の英会話を録音，分析した例は， Ozasa （③）等，少数であろう。

2　調査の方法

上記の目的にそって，次の要領で対話を録音した。

(1)　インフォーマント：教員養成課程で外国語（英語）を専攻する大学4年生，男子10名で留学経験等のない者。対話の組み合わせはランダムである。

(2)　録音日時：昭和54年4月24日，5月4日，5月22日，6月28日，7月3日。

(3)　録音手順：トピックは与えない。まず5分間日本語で対話し，その話の続きを次の5分間は英語でする。

3　分析の視点

はじめにも述べたように，分析の視点は談話にかかわる現象である。具体的には次の2点である。

(1)　Yes/No 疑問文への答え方。

(2)　話者交代後の最初の語句。

これらを視点とする理由は，まず(1)は中学校1年，2年で強調される，'short answer' は本当に妥当なものかを検討するためであり，(2)はデータの分析を通じて特に興味深い現象と思われたからである。

4　Yes / No 疑問文に対する答え方

疑問文に対する答え方の分類は Palmer （④：67）のものが有名である。 Palmer によると返答の仕方は， Laconic Answer （以下 LaA と略す）， Short Answer（以下 SA と略す），Long Answer （以下 LoA と略す）の3種類に大別できる。

（例）　Is this a table?
LaA: Yes. (No.)
SA: Yes, it is. (No, it isn't.)
LoA: Yes, it's a table. (No, it isn't a table; it's a chair.)　（④：67）

そして，定型会話 (conventional conversation) においては SA を用いることを奨めている（⑤：65）。さらに，今日では SA は定型会話においてのみならず，教科書の中においても返答の仕方のモデルとなっているといえる。SA の意義については疑問は持たれていないようである。しかし，SA は言語的観点から，また外国語教育の観点から，強調するに値するほど高い価値をもっているのであろうか。

まず，言語的観点から，Richards（⑥：136－141）が行った調査を考察する。彼は Yes/No 疑問文に対する答え方を，英語の小説や劇，それに4人の母国語話者について調べ，返答の仕方を次の6種類に分類している。すなわち，Class I は LaA，Class II は SA，Class III は Yes/No の次に主語，助動詞（動詞）を繰り返さず他の情報を付加するもの（例：Did you stop in Rome? Yes, I spent a week there.），Class IV は SA から Yes/No を省いた形（例：You are not going? I am.）であり，Class V は Yes/No の代わりに 'of course' などのシノニムで答える返答，Class VI は文脈によって間接的に肯定か否定かを示すものである。（例：Has something happened, mother? I'll be all right in a minute.）。Richards はそれぞれのクラスが返答総数に占める割合をパーセントで出しているが，詳しい結果は Richards（⑥：139）ならびに川尻（②：13－14）を参照されたい。興味深いことは，母国語話者によって SA が使われる割合が意外に小さいことである。その割合は，書きことばで3.8％，話しことばで11.2％を占めているにすぎない。逆に，多く使われる型は Class V や Class VI であるという。

また，書きことばについては田辺（⑦：1－14）が現代劇曲をデータに同様の調査を行い，同じような結果を得ている。田辺は，SA が「戯曲の動きとか人物の持つ雰囲気から推測するに，強意とか疎遠の間柄の会話などに起きるある種の固さ，または丁寧さ，の雰囲気を持つ。」とし，「アメリカ人の友人の話だが，Yes, it is. 型の応答を連発すると『不自然だ』という話を聞いたことがある。」と述べている。

さらに，私の調査の結果についてみると，SA (Class II) は自然な対話においては日本人の学習者もほとんど用いず，わずか1例のみであった。統制を加えない録音であるため，わずか18しかサンプルが取れなかったのが大きな難点であるが，1つの傾向は示しているであろう。すなわち，インフォーマントたちは，中，高のテキスト等で SA を繰り返し練習し，それを答え方のモデルとして知っているはずであるが，実際の会話においては口をついて出てこない，もしくは使おうとしないといえよう。以上のことから，SA は母国語話者の典型的な返答の仕方ではなく，また学習者も練習した割には実際には使用することの少ない表現であることが理解されよう。

Class I	4
Class II	1
Class III	7
Class IV	0
Class V	2
Class VI	4
	18

表1　各クラスの答え方の頻度（日本人大学生）

次に，外国語教育の観点から考察する。一般に SA が教育上もっともふさわしいとされる理由として，Yes 又は No のみの答は短すぎるし，また生徒が質問の意味を理解したか否かが教師にわからないということがあげられる。たしかに，'Are you a student?' に対して，'Yes, you are.' と答える生徒がいる。これは質問と返答の人称の呼応関係に難しさがあるからであろう。私は人称代名詞を学習する時は LaA よりも SA が有効であると

思う。しかし，たとえば 'Is this a pen?' に対しては LaA で十分ではないであろうか。疑問に思うことは，SA が一貫して返答のモデルとなっている現状である。SA が最適なのは質問と答における人称代名詞，助動詞などの呼応関係を学習する時ではないかと思う。呼応関係が十分に理解されると，前述の 'Yes, you are.' 式の誤りをおかすことはなくなるであろう。しかしそれ以後の学習においても一貫して SA を練習することは学習者に大きな負担となっているのでないかと懸念する。学習が進むにつれ，SA は生徒のレベル，言語材料の性質等を考慮して適宜用いる程度でよいのではないかと思う。

以上，言語的視点と教育的視点から検討してきたが，結論として次のことを示唆したい。SA はノーマルな英語の典型ではなく，学習者も実際の会話で用いることは少ない。そこで，より実際的な答え方として，Class III の答え方，すなわち Yes/No に何らかの新しいコメントを加えるという返答を練習するのはどうであろうか。たとえば，'Do you have a cap?' に対し，'Yes, I do. I have a cap' と練習するよりも 'Yes. I have a red cap.' のように答える練習をするわけである。このような練習を続けることによってより創造的な答え方も生まれてくるのではないかと思う。そして，コメントを加えるためには肯定文，否定文を用いて事物を説明する力が養われねばならず，そのような練習にこそ十分な時間がかけられるべきであると考える。

5 話者文代後の最初の語句

次の分析の視点は，話者が交代し別の話者が話し出す時の最初の語句に注目することである。そのような語句は，'I see.' や 'Is that so.' のように，相手の発言へのあいづちとして機能したり，また，'And ...' や 'So ...' のように，先行する，相手又は自分の発言を引き延ばしたり，説明を加えたりする機能をもつであろう。このような語句について，日本人インフォーマントとネイティブについて調べ，その頻度を示したのが表 2 である。表に出ているような語句を用いず，普通の文で始めている場合は数えられていない。ネイティブのデータについては，Crystal and Davy (①) の中で，会話参加者が 2 人からなる 6 つの章について調べたものである。この表から，日本人話者とネイティブ話者の特徴的な違いは，Wong (⑧：30－32) の言う 'repetition' を日本人が多用していることであろう。この現象は，以下の日本人話者による実例が示すように，相手の発言の一部を繰り返して応答することである（イタリックの部分）。

	日本人	ネイディブ
REPETITION	46	7
Yes (Yeah)	23	18
No	10	5
But	10	4
And	6	4
So	5	2
Oh (+yes)	1	4
I see	1	0
Well	0	7
You know	0	3
Text 中の単語総数	1,830 語	3,477 語

表 2　話者交代後の最初の語句の頻度

A: I have one younger sister.
B: *Younger sister.* (A: Yes.) How old?
A: She is, she is fourteen years old.
B: *Fourteen.*
A: *Fourteen.*
C: As for me, I exercise myself.
D: *Exercise?*
C: Exercise mean move my body.
D: *Body.*

日本人が1830 語からなる text の中で repetition を46回も用いているのに対し，ネイティブは3477 語の text の中でわずか7回しか使用していない。しかもそのうち5回は次のような 'Yes – Yes' のパターンであった。

E: No.
F: Yes.
E: *Yes.*

このことから， repetition の現象は日本人同士の英語会話に特徴的なスタイルの1つではないかと思われる。もし repetition が日本人にとって相手の発言に応答するための最も身近な手段であるとすれば，それは 'Japanese English' が好む，1種の会話のストラジーであると考えられる。日本人は多くの場合，単に repetition によって，あいづちを打ったり，驚きや不安を表明したり，また相手の発言の不明確な部分を聞き返したりするのである。この現象が，もし相手がネイティブである場合にも起こり，それが容認されるものであるとすれば，repetition は英語学習者が共有してもよい，英会話上の便法となりうるのではないかと考える。

6 おわりに

本稿で行った議論は次の2点である。

(1) Short Answer は会話の中ではネイティブも学習者もあまり用いないということ。

(2) 相手の発言への応答には repetition が便法の1つとして用いられること。

本研究はスピーキングに現れる英語を観察しようとした小さな試みであるが，今後は，発音，語い，文法等にわたって1つ1つ学習者の言語運用の実態を明らかにする必要があろう。さらに，今回はあくまで日本人同士の英会話に限られた分析であり，ネイティブを相手とした場合の日本人の言語行動が今後，記述，分析されねばならないであろう。

〔参考文献〕

① Crystal, D. and D. Davy (1975) *Advanced Conversational English.* Longman.
② 川尻武信 (1978)「指導技術としての英問英答」，『中国地区英語教育学会研究紀要』8, 11–15
③ Ozasa, T. (小篠敏明) (1979) "Characteristic Features of Spoken English: A Contrastive Study of English as Spoken by Japanese and Native Speakers,"『英語英文学論集』, 10, 187-229.
④ Palmer, H.E. (1921) *The Oral Method of Teaching Languages.* W. Heffer & Sons Ltd.
⑤ Palmer, H.E. and D. Palmer (1925) *English through Actions.*
⑥ Richards, J.C. (1971) "Answers to Yes/No Questions," *ELTJ*, 31, 2, 136-141.
⑦ 田辺洋二 (1971)「発話と応答 — dialog の一分析」，『学術研究ー外国語・外国文学編』20，1 – 14
⑧ Wong, I.F.H. (1977) " 'Fragmentary' Questions: A Study of Some 'Incomplete' Utterances Functioning as Questions," *RELCJ*, 8, 1, 29-41.